

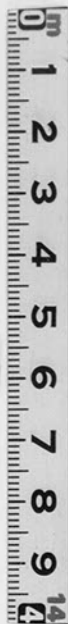
景



號刊創



大正二年四月三十日（即陽曆五月一日）發行
大正二年四月三十日（即陽曆五月一日）發行





表紙畫……………南 薰 造
扉畫……………小 山 周 次

夕暮……………(一)……三 木 露 風
ダ・井・チの言葉……………(四)……片 上 伸
風激しく……………(九)……前 田 夕 暮
終日……………(一〇)……室 生 犀 星
もぐらの神様……………(一七)……白 鳥 省 吾
結ばれ……………(三三)……西 宮 藤 朝

鏡……………(三七)……門 間 春 雄

鳩……………(三九)……太 田 宗 篤
あけぼの……………(四〇)……鈴 木 末 造
あはゆき……………(四一)……唐 澤 章
バツカス神に……………(四二)……山 内 久 太 郎
蟲……………(四三)……薄 井 暮 光
哀話……………(四四)……櫻 井 朱 春
小曲……………(四五)……青 柳 花 明
砂上……………(四七)……平 井 牧 村



夕暮

三木露風

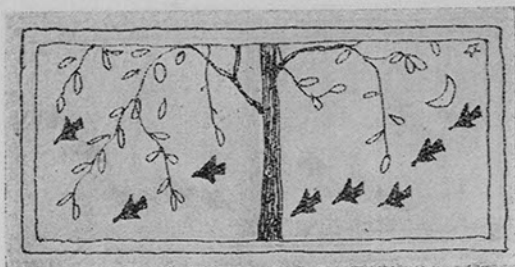
やはらかき水の流れに
溶けてうつる、夕の聖き赤
ろの陰に織りこまるひらめき
空と地との、波うてる二つの罫。
罫の色縁に

かなしみ	 五〇	永田満穂
光	 五二	福武鶴二
賦	 五四	川崎薄明
猫の瞳	 五五	鈴木鐸郎
寶玉集	 五七	池上修等
マダム・ギオン	 七〇	山村暮鳥
肉體の合奏の進行曲	 八四	山村暮鳥
消息		

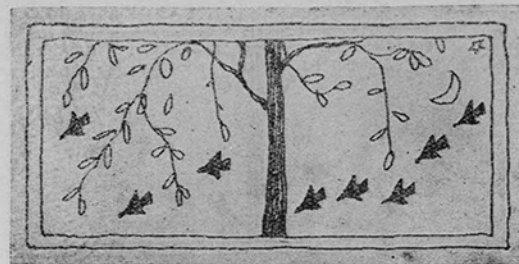


ゆるきうねりとなる野
 や、暗くしめりたれど空は
 稻妻の中に黙せし聖者の眼。
 耕やす車、小さく失せぬ
 さてまた黒き低音の獣ら
 せはしき息の中に混じ合ひぬ
 雑聞するにはひの夢に。

かけりゆく色はたゞ二つ
 つらなる雲を出でて見ゆ、



寂きたりて、地はみづから
 漂ふひびきとなり合せつつ。



ダ・ヴィンチの言葉

片上 伸

どうか私を嘲つてくれるな！ 私は貧しくはないのだ！ 多くのものを欲する人こそ寧ろ貧しいのだ。

よく費した一日が幸福な眠りを齎らすやうに、よく用ひられた一生は幸福な死を齎らす。

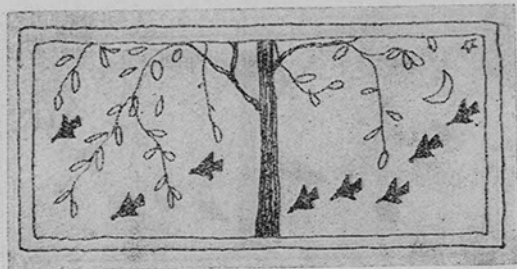
私は自分で如何にして生きべきかを學んでゐると思つてゐた間に、私は如何にして死すべきかを學んで居つたのだ。

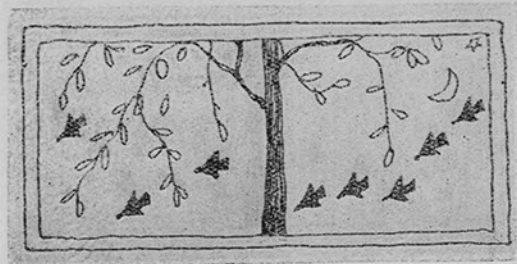
よく費された一生は長い。

川の中で、人の觸れる水は、過ぎて行つた水の最後のもので、流れて来る水の最初のものである。時もうれと同じだ。

薪はうれを燃やすところの火を養ふ。

ろの師を乗り越えない弟子はつまらない弟





子である。

學問は將帥である。實行は兵卒である。

・ どの部分も全体と結び附かうといふ氣である。それによつて自分の不完全から免かれられるように。

自然は決して自分の法則を破らない。

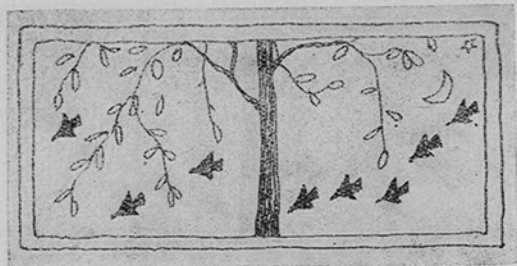
自分の正しく理解しないものを褒めるのは悪い。しかしそれを悪く言ふのは尙悪い。

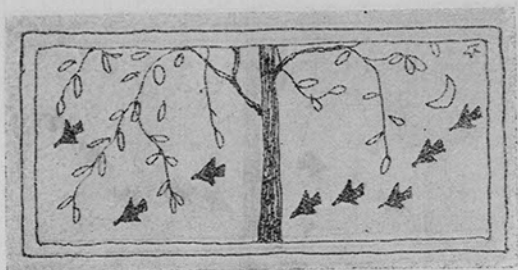
價値のない人間のことをよく言ふのは、善い人間のことを悪く言ふやうなものだ。

人生を價値ありとしないものは、生きるに値ひしない。

惡を罰することを憚るものは、惡をなすことを許すものである。

人間は物言ふ大いなる力を有つてゐる。しかしその大部分は空虚で偽りである。動物は僅かしか有つてゐない。しかもその僅かは有用で眞實である。大なる偽りよりは少しの確





前田夕暮

風激しく驛標をゆりて吹けりけりさと煤烟の
渦巻きすぎる



風激しく我が頬をふきつ煤烟は我が眼に入
て針さす如し

しくしくと我が眼痛みてひらかれず涙ながし
つわが歩みたり

わが病める妻の枕べほつねんど坐りてあれば
わが眼は暗し

白粥をたうべんとしてわが妻はおきいでにけ
り夕くらがりに

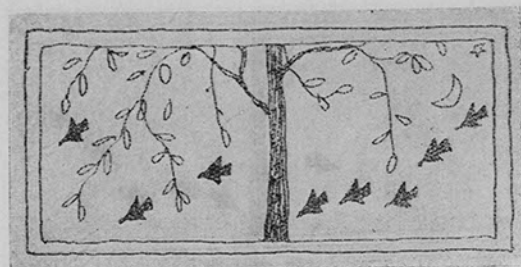
×

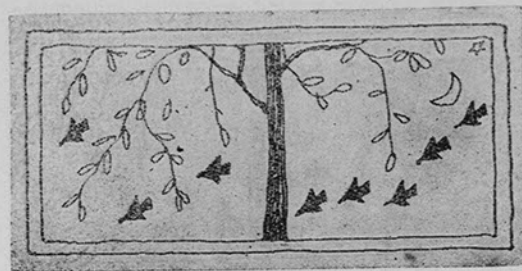
野のなかの一もと木蓮花ひらく前の木蓮幹光
りたり

木蓮は地上に揺れてゐたりけり少年数人樹に
のぼりたる

蒼青くふくらみし樹に少年がよちて青枝ほき
と手折るも

われ野に大声あげてわらひけり夕日は太き烟
突の彼方に



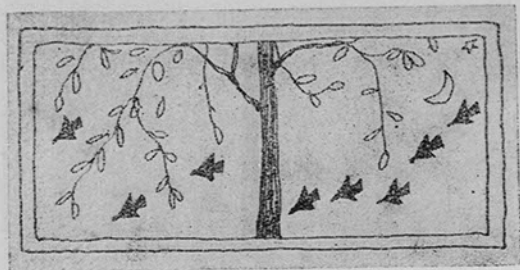


かけかちの不義者が二人野にねし野木の下か
げ草青みたり

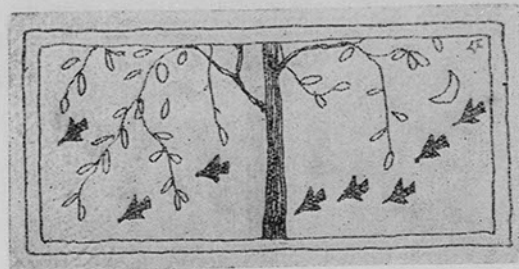
青枝のしなやかさもてわがからだひしひしと
うてり日にさらしつ

終日

室生犀星



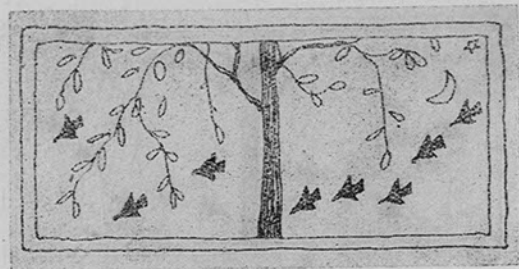
いよいよ魚はあをくなり
いよいよ魚はするごかり。
われかなしみてものを食ます。
魚かなしみて陰をいす。
いよいよあをき世界となり
われものをはます終日は



みやこの街をさまよひぬ。
いよいよ魚はあをくなる。

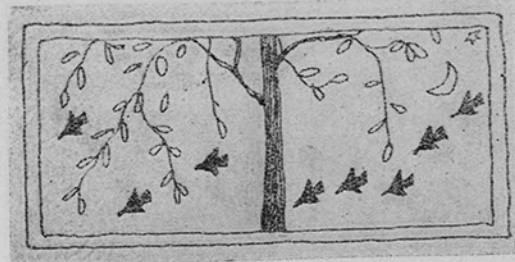
春の寺

うつくしきみ寺なり
み寺にさくられうらなれば
うぐひすしたたり
さくら樹にすすめら交りて
かにかんと鐘鳴りてすすろなり。
かにかんと鐘鳴りてすすろなれば
おとめらひうかに



霞

ちちははのなすべきことをしてあろふなり。
寺塔くれなるにんねんど
うつくしき春のみ寺なり。
ふくらみて青める山
ひかりさびしき明眸の
山にもひろみこがれこがれわたるか。
あかき霞を着け
なにのうれしさなるぞ
野はとんぼがへりす。

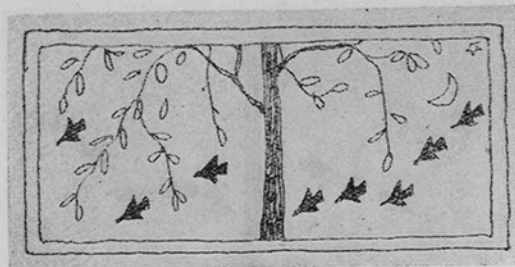


らんらんと陽氣はことにさかなれば
 菜種の畑はかんじ極まり
 河の上に
 流れうらがむとせるにあらずや。
 さけてながれよ菜種の畑
 ゆめにはあらず
 樹はみな鳴りてはあゆむ。
 ひかりさびしき明眸の
 山にもひろみがれこがれわたるか。

むぐらの神様

白鳥省吾

幾千里はてしも知らぬ薄明りもぐらは嘆くさ
 んたまりあと
 しみじみと萌ゆる草根にゆきあたり蒼空の匂
 ひ深く嗅ぎたれ





銃の音身ちかくたねす聞ゆれば土黄色に渦ま
きにける

もぐら少女、もぐら男に行き逢はず土堀りあ
ぐみ息絶ねにけり

びろうごの服を召したり身も軽く宿たちいで
てゆきて歸らず

ほのかにも花粉匂ふとのぎしに光に打たれ
息絶ねにけり

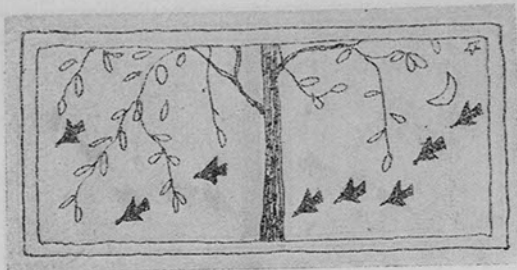
うつとりと瑪瑙のいろに眼をひらき春の鼓動

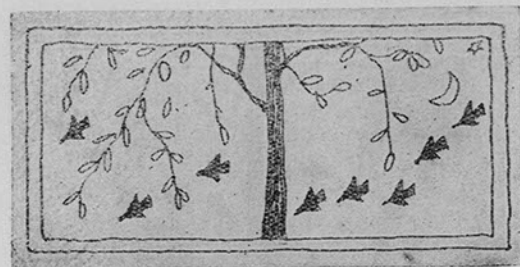
を感じけらすや

朝日影かなりや啼けばほのかにももぐらも目
覺めうごきうめけり

春の雨さんさんとして降りしきる奥底にしも
もぐら輝く

火のごとく雞啼けばびろうごのもぐらは嘆く
曙の底



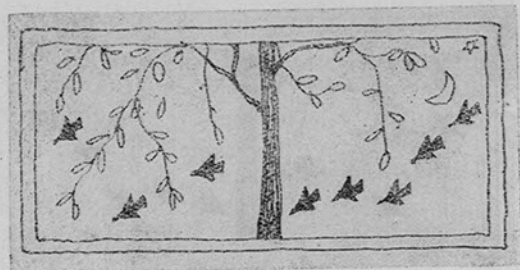


春の現實

高き高き煙突に人仕事せり日にあたたまり世
をば思はず

煙突の頂邊^{うへべ}に人ありかやける空には春日爛
れもゆるも

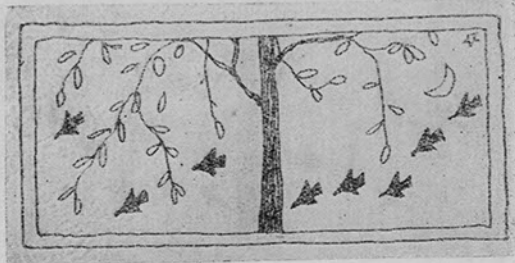
一列に兵士は捧げ銃^{てう}をせり野にはのぼの青
桐萌ゆる



汗くさき兵士寝ころびパン噛^かちる土手にしみ
じみ春くさのもゆ

野に普ねく春日^{はるひ}の照れば人ごゑも特更めきて
きこわくるかな

野いちめんに雪かやけば一點の人は蠟^{ろう}ども
燃^もわて揺^ゆれゆく



結はれ

西宮 藤朝

結ばれは断れてしまつた、
何時の間に断れたのだ。

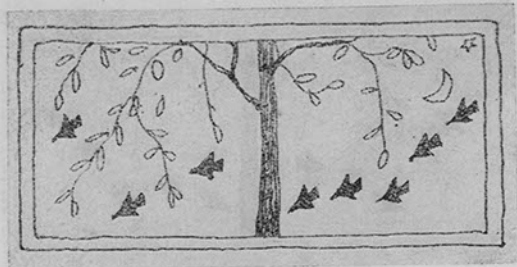
さうして「時」に問ふと、
黒いボールを被いだまゝ笑つてゐる、
白い眼をパチ付かせて黙つてゐる。

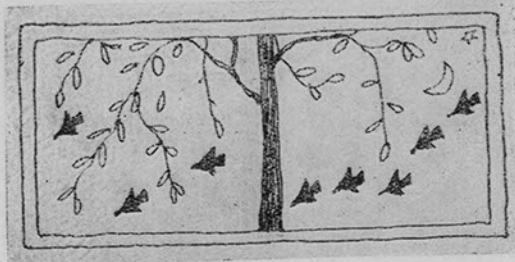
おゝ一切の靈はばら／＼になつた、
後尾を引摺りながら
各々に自分の好きな方向に行く
自分の好きな事をする、
自分の好きな事を言ふ。

結ばれは断れて終つた、
おゝ其の結び目は何處へ行つた。

おゝ「時」は何うしたのだ、
狂になつたのか？ 嘲弄つたのか？
何と云つて呉れ。

或る靈は獸と共に野原に寝てゐる、
或る靈は雲の上に登つて行つて、

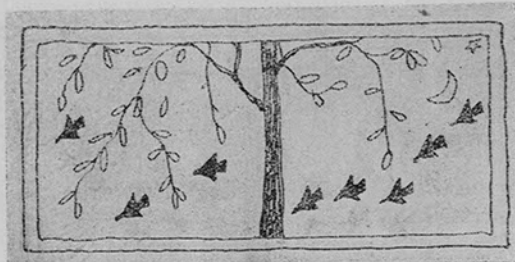




姿の無い神と話をしてゐる、
或る靈は自分の生んだ靈を殺してゐる、
或る靈は地上に闇を振撒いてゐる、
或る靈は其の中で呻き苦しんでゐる。

おゝ靈等はばら／＼になつた、
大きくなる者は山のやうになる、
小さくなる者は路傍の小石のやうになる、
さうして此次には何うなるのだ？
其時には人間が無くなるのか？

「時」は何うしたのだ、
其の失つた結び目を何處にやつたのだ、



時よ、黒いゴールを被いだまゝの「時」よ。
何とか言つて呉れ、
狂になつたのか？ 嘲弄つたのか？
奇蹟は何時行はれるのだ、
失はれた結び目は又元の通りになるのか？
ばら／＼になつた靈が、
又元の通り集つて来るのか？

酔拂ひが何時酔を醒ますのだ、
穴の中に這つて行つた奴は何時出て来るのだ、
片腕をもいだ奴は何時くつ付けられるのだ、
盲目の眼は何時開くのだ、
零れた涙が何時かわくのだ、



失はれた歎びは何時戻つて来るのだ。

「時」は何うしたのだ、

黒いエールを被いだま、後方で笑つてゐる、

白い眼をバチ付かせて黙つてゐる、

何とか言つてくれ、

人間のどん底の血を結んでくれ、

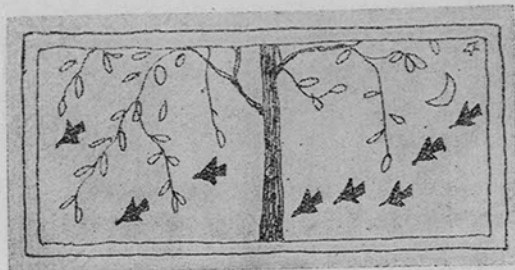
悲哀と歡喜の綱を結んでくれ。

鏡

門間 春雄

野蠻人に鏡を見せると、非常に驚くうた。
うして必ず裏を返へして見ると云ふ。

政小父と呼んだ狂人があつた。鏡を見さへすれば、敵にでも逢つた様に怒つて、壊さうとする。病氣が募るにつけ、毎日この家に





か行つて、鏡を壊して歩いた。斧を振つて、理髮所に押しかけた時、妻と息子が抱きついて、齒切りをして口惜しがった。

みかん色の灯のついた行燈に、濃い藍色の夜は迫つて、邊りはコトリとも音がせぬ。一人の老婆が片肌をぬいで鏡に向つた。鏡には、ゾツとする様な、耳下まで口の割れた、銀の眼の猫の顔がうつて居る。

これは、子供の折、なるべくこの頁だけは開けぬ様に注意をした草双紙の挿畫である。

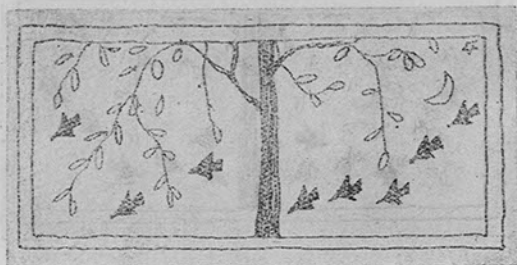
祖父に連れられて、理髮所に行くと、「あん

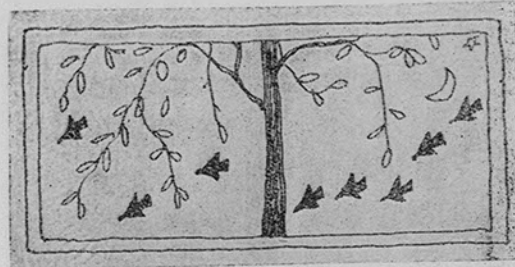
たは、こつちに來なんし」と云つて、一間と離るれば、もう自分の顔ではない様に伸びたり、縮んだりしてうつる鏡に向はせられた。

祖父は、オランダ鏡だと云つて聞かせた。

子供の折、毎日通學の往復に、鎮守様の前を通つた。薄暗い奥の院には、いつも、キラリと丸い鏡が光つて居た。この鏡が曇れば村に不吉な事があると云ふ。それは雲形の臺のついた花骨牌の二十枚もの、月の様に丸い鏡であつた。これが御神體であつたと云ふ。

世を恐ぶ虚無僧笠の揺るゝにつれて、尺八





の音は、長火鉢に凭れて、灰に文字書く女の耳に流れる。いろ／＼と出て、軒に立つた女は、赤い袖口からキラリと鏡を出す。眉の濃い、髻あとの青々した男盛りの顔がうつった。仇討双紙の口繪。

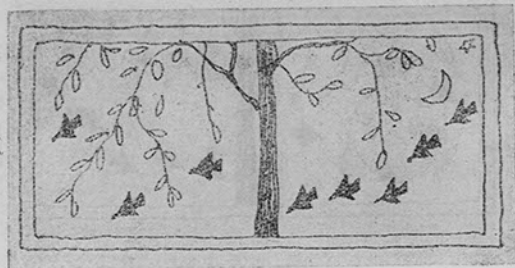
尋常二三年の頃、山内一豊の妻が、鏡の底から金を出して、夫の好む馬を買ったと云ふ話を聞いて、勇んで家に歸つて、母に語つたら、母は其話をどうに知つて居た。

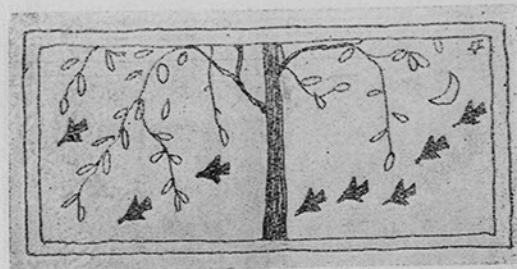
蓮華往生を願ひ出た女が、最後のお題目を唱へて合掌をする時、ふと懷の鏡に氣がつい

て尻の下に据わればかりに、事が發覺れた。後手にされた坊様達がぞろ／＼と、お白洲に並んだ事であらう。

「これ、ようお聞きや」と云つて、坊様は、黒くなつた蠟燭の心が傾いて居るのも知らず、御説教をされる。

「なあ、鏡と鏡を向ひ合はして立てると、中にはなんにもうつらない様、お互の心に曇りなく……」それを聞いて、子供心に早く家に歸つて、鏡と鏡を向ひ合はして立て、見ようと思つたけれど、まだ一度もやつて見た事がない。





鳩

太田宗篤

色もゆかしき紺青鳩の
なつかしき淡紅色の嘴より、
春は……
うつくしき戀の紅玉ころ、
まろびいづる……

あけぼの

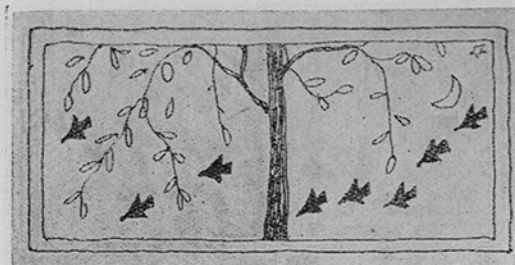
鈴木末造



病癒にたる村々のむらさき、
森には駈落の影おぼろ、
見渡す緑野は窓掛をはらへり。

破れ月ほどほとと衰へて
光なき命かい抱く。

思ひ變りの空の沼、
心つくしの黒鳥はこぎゆく。



露は小魚の青き眼にみつめ、
ふりかゝる金粉の舞蹈
陽は今浮び出でむとして
地平のかなたをさ迷へり。

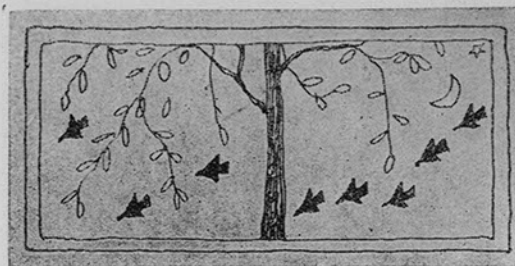
あはゆき 唐澤章

ふれなば消ゆるあはゆきに
似たるなやみに苦しむと
わがこの頃のこのころ
君しりたらば
死すもうらまじ……。

浪の音

日もすがら





はた、夜もすがら
おもひをこめて松原に
みだれかゝれる浪のおど。

低 唱

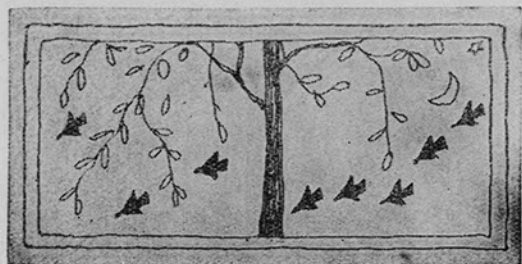
黙して君を想へば
泪ながれてはてなし

黙して死をおもへば

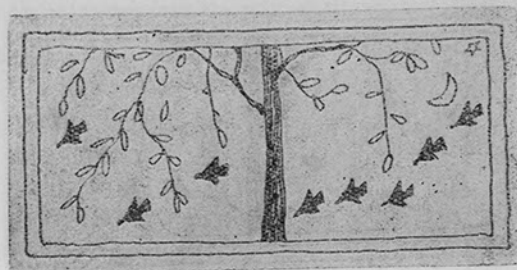
こゝろ、泉の如き清らかさあり。

空の晴れたる卯月なれば

なにごとも心かたむけうる
幸福のさみしさよ。



なにごとも心かたむけうる
幸福のさみしさよ。



バカス神に

山内久太郎

人知れず、

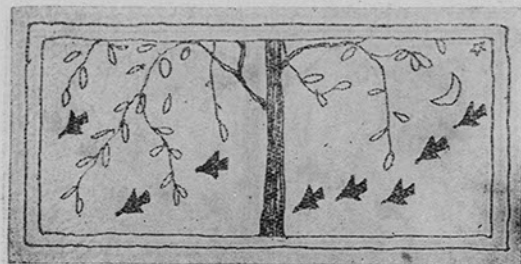
われのこころの地下室に、
戀の泪で醸した甕の酒。

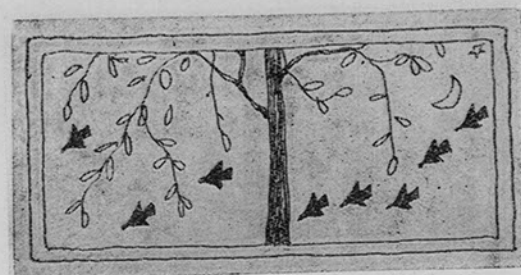
いまし、甕の封を切り、

泡を掻きすて、泡を掻きすつれば、
錆いろの澱のみのこる。

病みなやむ夜の長さに

酸酔期を逸した、
悲しい酒の匂ひよ。

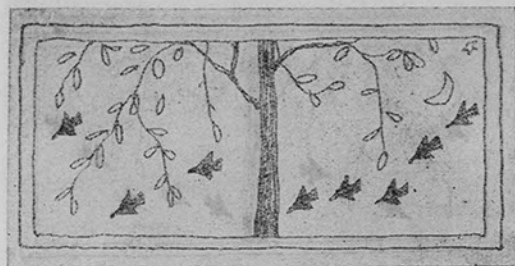




蟲

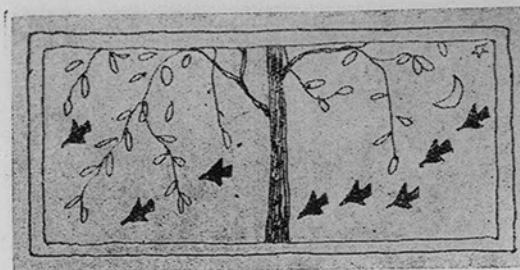
薄井暮光

夜の鈍ふき青を背に
はいめぐる虫
わがむねに巢くい
蜂の巢の癡滅に
亡びゆくものの力なき眩惑。
なやましきあしごりに
わがころはうちひるみ
はいめぐる虫の背に



憂愁は沼のごとくひかり
わが瞳はうるめり。
めぐる日と月のごとく
虫はたねすはいめぐり
憂愁と悔恨と
かきいだきあふひごとき
砂漠のごとき疲れは
幕のごとくむねにひろがり
うす青きむしの背のみかなし。

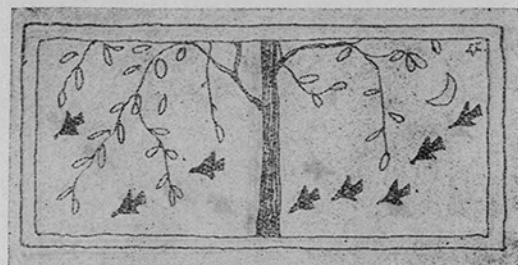
薄井暮光



哀話

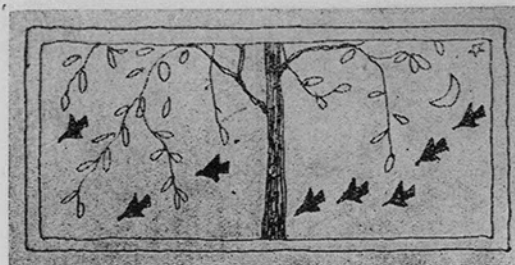
櫻井朱春

晝のはかなさに
なりいでし、あはれ
ねらんだ小唄の
かなしさよ。
むしばまれし
わがところに
ほの青くも泌みて
ああ、
ふりしオルゴールの音はかなし。



夢

五月の夢は
銀どうす紫の夢。
窓下のフラスコなる
きりの花、
晝のうれひに
うらうらと
銀の夢、
うす紫の夢。



小曲

青柳花明

1
つゆくさは

寂しきいろに花をつけたり。

水邊を吾れの歩めば

寂しき顔は水にうつれり。

—— ころ泣かるる。

2

静けさは吾れにたふとし。

代々木野の立木の下きに
吾がころ春の陽と溶けあへりけり。
ひと日。

3

はる。

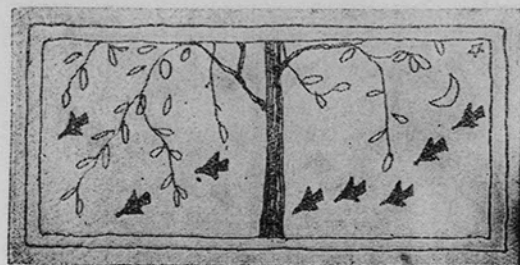
野にいでてうとうとすれば

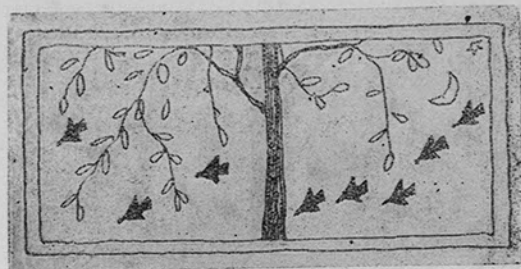
野もうとうとと眠りけり。

4

若きめだかに

春の水はころよし。





吾れの瞳に、
若きめだかはこころよし。
水は唯、静に吾れの瞳とめだかさを泳がしむ。

5

菜の花は
まことま黄いろに咲き出でぬ。
吾がこころ、
ただひとすじに黄なる菜の花をよろこべり。

遠くここへ春の風が吹く
おと木霊の立木の音

砂 上

平井牧村

砂丘

その軽いスロープには
蒼い三月の浪と、

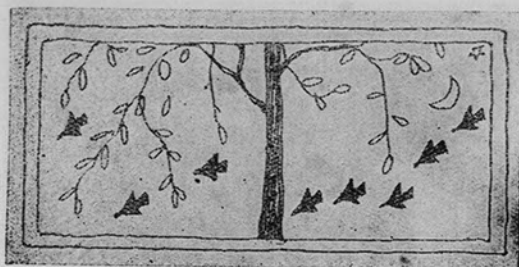
暖い日光がしたしんで居る。

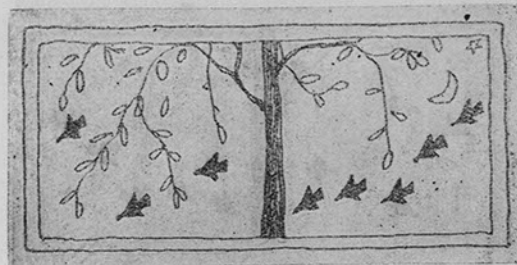
砂上に立ちて

海をのぞめば

魂はすべての感觸を失つて

夢のごとうつとりと





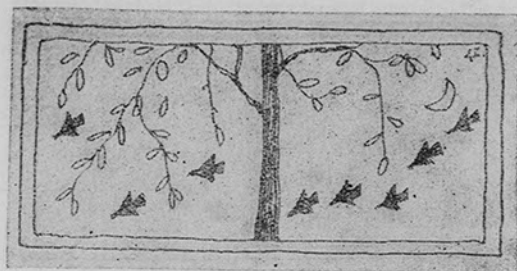
海草の匂を嗅いで居る、
あるかなさかの匂さへ
たいなんこのう、なつかしい。

眼鏡屋

きい／＼と
齒の浮くように刻む音……
ぎやまんの玉のすゝりなき。

今日も通りのめがねやの
若い番頭が物思ひ、
物を思ひつ摺る玉に

平井 達 林



玉摺機械のうらなみだ、
なんとしよう、
三つの戀がもつれたら……

はつ夏

ころ／＼とまろび出でたる
毛糸は青し、
はつ夏なれば
少女心も青からん。

平井 達 林



かなしみ

永田満穂

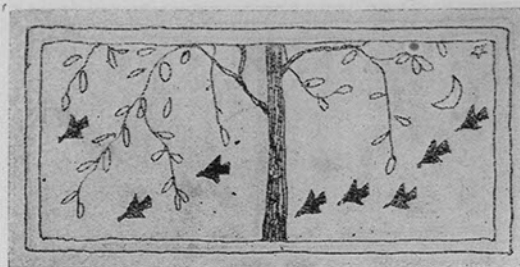
ろこには常に雪降れり。
重くかきたれし灰色の空より
ゆくへさだめすそこはか思ひ、
音なく夢み雪降れり。

かくてしら／＼積む雪に
さゝめく胸の笹なれば、

すべての悲しみがそれにまつはり



奏でいづるその聲々のひびきは
白銀いろにふるへつつ、
うらぶれし
心かすかに啜泣く――

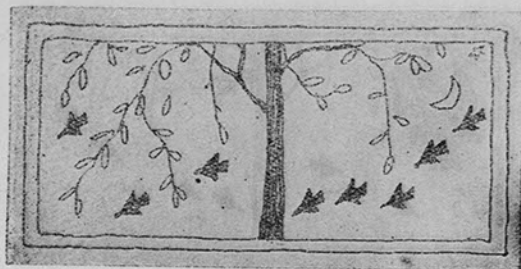


光

福武鶴二

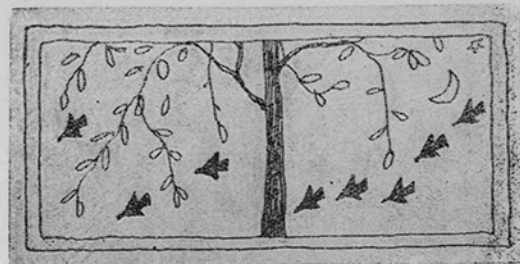
光は陰をつくりてはひあがり
 なやみはまだらに沁みる。
 靈魂がくるひ出す
 まろびまろび、光と陰をなひながら。

金の小函のくづる、
 水銀の玉はほごばしり
 光にからみて
 なやみはてたる感覚、



いとしや、狂女の美しき瞳。

光はとけて
 恐ろしき紅のまぼろしを流す。



賦

川崎 薄明

ちらちらと
薄い日ざしにとくる雪、
落日のにじんだ雪の痛ましさを
しやくなげの林のほとり
口笛に小鳥を呼べば
すゝろの心榮へ、
淡雪の淡き哀しみ……

猫の瞳

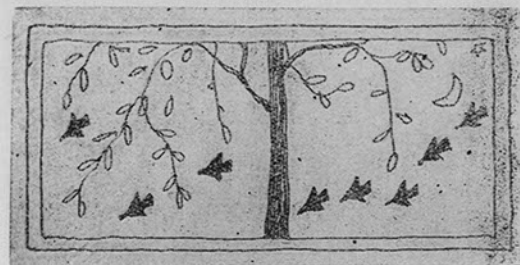
鈴木 鐸郎



九に一かけては一となり
六より一ひけば零となる、
ひよろひよろと
赤いシャツの鈕が光る、
恐ろしい雞の翹。

2

ごろ、ごろ、ごろと



幽かにも三毛猫の
喉には玉がゆききする。
これが洒落だと、
ごろごろごろ……と。

3

明い廊下の片隅に
温い光を浴びながら
上がり踵、下り踵
ぐるぐる廻つて猫の踵、
しやんこ、しやんこ、板が鳴る。

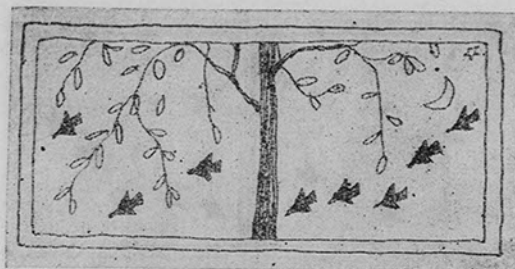
寶玉集

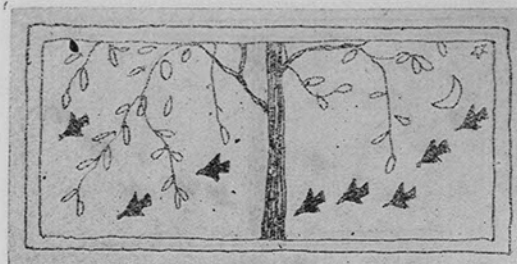
その一

池上 修

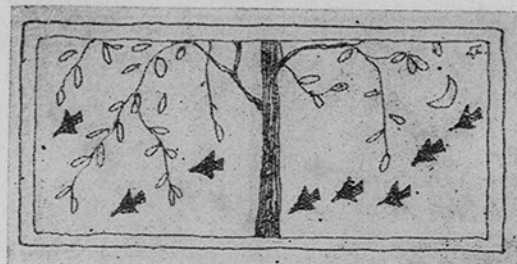
暮れかけて沼のかなたの木の梢うらさみしさに
揺ぐなりけり

木は悲し照る日のひかりおとろへし生命の上
のその木は悲し





霧のなかに赤く光りて停車場の信號燈ありわ
 が愁ひあり
 卷煙草ぐちにあつればほろぼろとわが悲しみ
 のうすむらさきに
 太陽の落ちゆくころは木々の芽のうす光りし
 てわれもさみしや
 人間のかなしき謎は謎のままほのかに櫻咲き
 ろめにけり



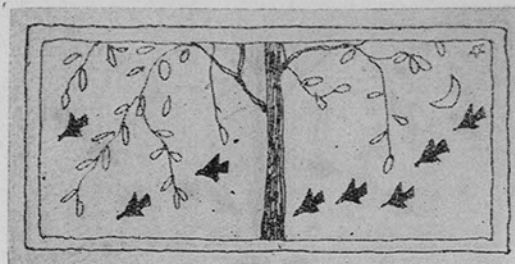
何か何か世間がさわぐよな事して死にたいな
 あ、蛙鳴くなり
 さし木せし木が根づいたといふ母の消息あの
 女いま何處にをるらむ

その二

森 花 葉

うす青き風山蘭の花にあり溪の日暮れは淋し
 かりけり

春の日の空一めんのかがやきに眼盲ひぬわれ



は行方^{ゆくへ}を知らず

罪の子は鉦叩くころよかりけり鉦叩くこそな
ほよかりけり

開墾の春の土くれやはらかくわが躑^{あぐさ}にぐづれ
ゆくかな

春の日をあびて草木はそよげどもわれには添
はずかなしかりけり

その三

櫻井朱春

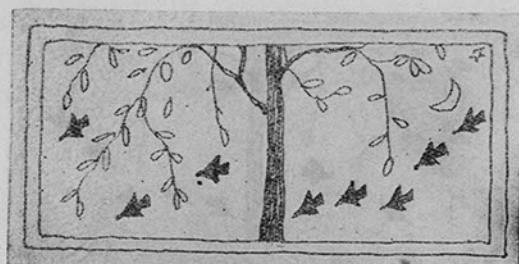
ひさびさにミルクをのめばやや青きくちあた
りにもろと悲しまる

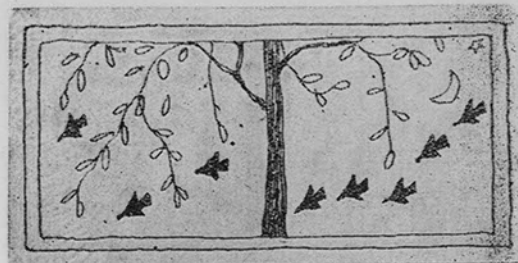
ふさぎの虫はやうやくにわれに巣くいてうす
嘆きする

緑なる瓦斯の灯を見守りつあはれ都はなつか
しきかも

丘にきて汽車ゆく方を眺めつつ旅なつかしと
なみだぐむかも

かの汽車の窓によりろひ涙する若き女もひと





りあるべし

盆栽などに水やれば草木ながらになつかしと思ふなりけり

くるくるとめぐりて紅しくくるとまはりて青しわれの生ずも

その四

坂本牧川

庭木庭木庭木もすべてゆらゆらと揺げりひと日雨ふりやます

雨後の青ねぎしんしんと青ねぎ畑に日は照れりかも

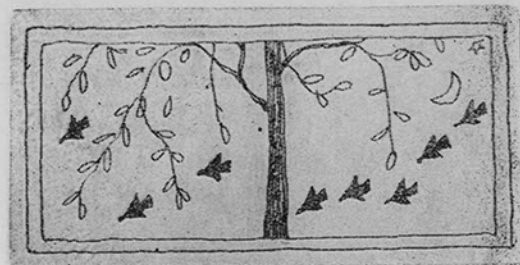
その五

森田二郎

おもひおもひの足のあどかな砂道をひとりし行けば日の暮れかかる

夕暮の海のしづけさ荘として見て居たりけりふところ手して





その六

篠村海桐花

冬が行く——うづろあるきの目に入りし紅き
木の實のわすれがたかり

その七

戸津たりゑ

ひねびねと寒降る日のうすぐらさわが神経の
いたみいづるかな

君とわかれ悲しき涙ながしたる夕の街にうす

みづれ降る

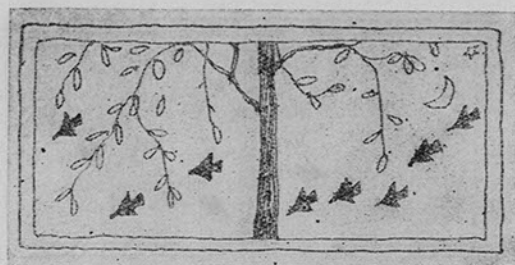
魂の消ね入るごとく眼をさぬ林をわたる風
の遠音に

母とわれ腫にてもものいふことをさね冷たき家
のなかにおぼねぬ

母上よもの問ひますな思ふまま泣きて心の晴
るるそれまで

その八

土田露子





物思へ雪しんしんと闇の夜のともしび燃ゆる
心ず燃ゆる

その九

磯貝 彌

「泣けなけだんと泣けもつと泣け酒は山吹いろ
に澄みけり

その十

齋藤はつね

わが頬もこのごろすこし瘦せにけり木々の梢

の芽もいろづけり

その十一

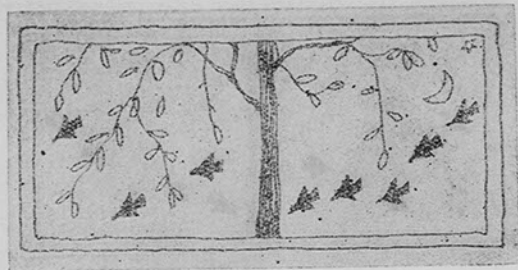
香原一勢

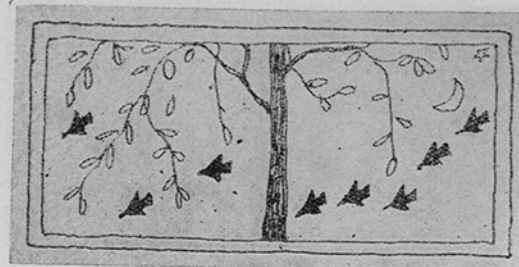
おほけなく簾鷺のやぶに鳴くわれ平凡とした
しめりけり

その十二

遠見政雄

夕空にはの青白き梨の花かなしきものは戀な
りしかな





その十三

印田 巨鳥

つとふれし闇の木の肌おののけりわがこの頃
のいのちの如く

菜の花にくれせまりする夕風とこころしたし
み女を待てり

米とげばわらはれにけり赤き入日三味線草に
きね残りけり

その十四

森山 譽志男

たちこめし朝のさ霧をなつかしみ朝のさ霧に
母病みませり

その十五

比佐 絹子

繼母は悲しからずや春雨の夜のまごゐにうち
まじり居り





その十六

山路 鈴蘭

時は春われらは少女雨の日の白木蓮をなげく
なりけり

その十七

遠藤 秋果

鍬をあげまた鍬おろしどこしへに土を耕^かねさ
む土をかへさむ

その十八

青柳 花明

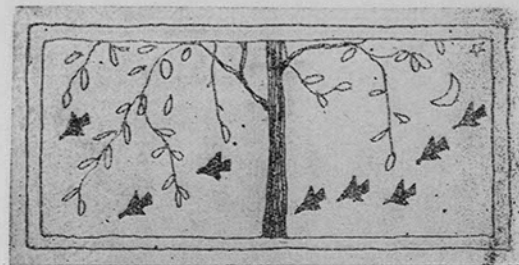
若草のうすあまき香に小羊もわれももよほす
春の食欲

その十九

村上 伸一

寶玉をいだきて若き麥踏まむ麥踏まむこころ
の躍る





その二十

鈴木末造

この少女憎しむ親の心などおもひあはせつ雪
ふりやます

雪ははや山に白しといひけるにちろちろと小
鳥啼きいでにけり

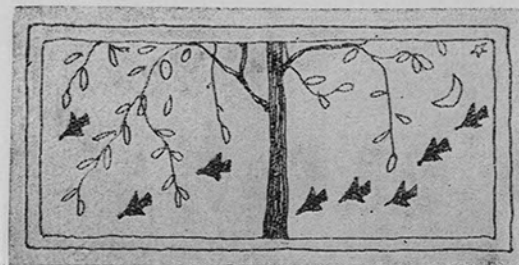
マダム・ギオン

山村暮鳥

クワイティム
静默主義に就て

ジャン・マリイ・ボサビエール・ド・ラ・モガトの生れたのはモンタギイ、
千六百四十八年の春四月復活祭なる十三日の夕であつた。病氣がちな幼少
の頃から、その周囲の人々に尊敬をもつて遇せられたる宗教的生活の大人
びた模倣をするのでよく知られてゐた。小さい尼さんであつた。そんな服
装をするのを無上のたのしみとした。四五才で、はやくも殉教を好んだ。
學校友達に彼女を白い敷布の上に据け、髪に香油を灑ぎ、そしてその首を
斬らうとして準備をさせた。けれどいつも友達に、そんな遊戯に對する勇





氣の失墜は彼女が勝利の笑ひとなった。

彼女は母に愛されてはゐなかつた。一人の乱暴な弟につき廻された。家において家畜かきもなければ下婢等の犠牲であつた。虐待から怒り易く、怖氣から虚言吐きに、だんだんさ育つた。

十才の時、病室でバイブルを發見けた。朝から晩まで記憶に托せて讀み耽つた。彼女は言ふ。サン・フランシス(聖フランシス)ド・セルの或る書物「マダム・ド・シャントルの一生」がその手に入つた。後のものからは強烈な刺激を受けたやうである。それで、彼女は謙讓を知り、測る可らざる嚴肅の意味を知り、けだかき寛裕で濫費された慈善を知り、歡喜の異象を知り、聖徳のほまれに依て行はれた奇蹟を知り、名高き熱狂者が彼女の胸の上に赤熱の鐵をもつて描いたところの聖なる御名、耶穌、その人格に對する勇敢を知つた。齡僅かに十二才の一少女は、勿論、少女としてではあつたがそれらの事實を自身の上に移して行ひはじめた。人を援助けた。貧しき者につかぬた。そしてその赤熱の鉄である勇氣の失せざるためにキリストの御名なる大きな針をもつてそれを心に縫ひ附けた。尼



僧となるの認許を得るため修道院に手紙をかくて送つたこともあつた。

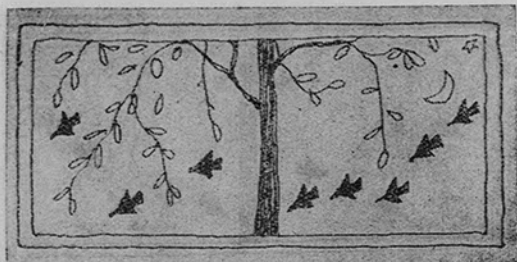
虚勢は直に暴露された。然しながらその努力は如何に彼女がその中に成長したところの宗教的團圓氣を愛したか、亦、眞理は詳々説かれるより更に得道に於て順利なるものなるかを示してゐる。

成熟と共に、宗教は虚榮に彼女を讓つた。その華美な容姿と匂やかな言葉の力とは彼女をして社交界の花たらしめるのに適して充分であつた。身のまはりの裝飾に氣を奪はれるやうになり、美貌に於ける競争に敵を作り、嫉妬の炎を燃やすやうにまでなつた。その年、聖女テレサの如く、物語りめける書物などに溺れて夜を更すことも珍らしくはなかつた。自叙傳を見れば武俠と情欲とのそれらの文字に影響されたその乱行の経験が瞭かにされてゐる。十六才になるやらずで彼女は富豪なる、二三日前に相見なければかりのエム・ヤンと結婚した。この紳士は彼女より二十二も年上であつた。

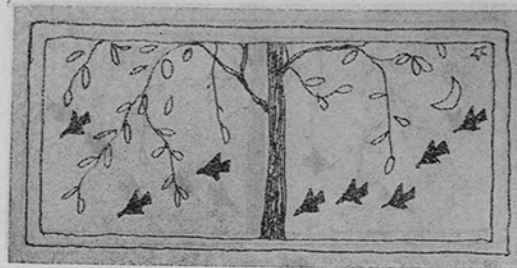
彼女の過失に就ては何等嚴格な記録はないが、唯、其人の家の運命が彼等(彼女と其良人)を矯正するために數年間の全く機働のない學校であつ



たことだけは事實である。眞人はその母と一所に住んでゐた。その母は野
 卑で頑固で吝嗇であつた。こんな性癖がその富に遺憾なく現はれてゐた。
 そんな金の中にあるながら、一文のことですら口喧しく、厨房を罵り廻つて、
 それで幸福な女であつた。偏狭な量見の全力を擧げてその母はギオン夫人
 を憎んだやうである。眞人は利己的からではあつたが、兎に角其の妻を愛し
 た。彼女が病氣にでも横はらうものなら彼は全く慰藉無き者の如くであつ
 た。彼女に對して強い言葉を返すものを見れば忽ち情火の中に飛び込んだ。
 然し、母の煽動で、絶えず背酷に彼女を遇つて、止めなかつた。彼の痛風
 の脚によく仕えたところの一人の器用な少婦はそれを知つてゐて何かと彼
 女をなだめたり相談對手になつたりした。生家に於けるギオン夫人は何時
 も優雅、そして雅美、眞人の屋根の下では丁重が誇りとして賤められ叱責
 せられるのである。物を言ふ時には立てられた耳で聴かれ、唇の動くや、
 反駁なしにはすまない。従つて凡てが愚圖々々として見られ、進んですれ
 ば好意的に取られた。結局、だから無作法にも沈黙するの外なかつた。生
 家に來て、歸れば嫌のやうな言葉で迎はられると、両親は両親でその新し



い結合のため反自然にも我が子のやうには顧みず、冷淡である。姑は毎日
 起るから寐るまで巧みな悪意で絶えず鮮かな憤怒を燃やしてゐる。年若き
 少女の汚れなき靈魂は全くやぶれざるを得ず、破れた。彼女は今の頃既に
 聰明と奇智によつて令聞高きものであつた。そこで彼女は交友仲間と夢
 覺に犯され、精神病的に、固くなり、うして黙想した。まるで一幅の阿呆
 の圖である。集會毎に彼女は對者として擯まれた。訪問の客は彼女が攻撃
 される目録の中は導かれた。胸に悲痛も湧くであらうよ。一切は今の欲望
 と異ふに、心に適する何かを彼女は求めればならない！ しかしそれは遅
 かつた。長くもあらぬその生涯の物語はいつしか過ぎ去つた。彼女の悲哀
 を抑すべき心をもつ友は一人だに無い。少時、彼女はすべての義務を掛け
 なく遂行して、些の怠慢もなかつた。深切と忍耐的の快活と惡を善に取る
 こゝに依て、より深切なる待遇を救はんと努めた。感情的な言葉を返さぬ
 ためにその舌を断切らうとさえした。隠さうとしても隠すことのできない
 涙でわれと我が身を慘酷にも苦めた。然し彼等の粗野で頑迷な性質には勝
 ち得べくも無い、如何に大なる寛容もこれにはたゞさるゝ果れた。けれど如

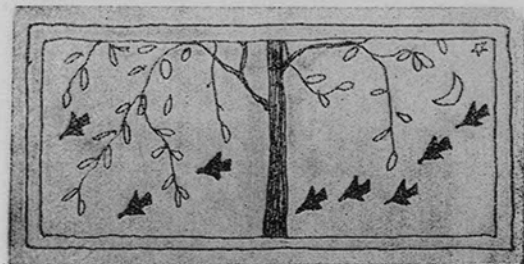


何にして彼等の心は斯も和かぬのであらう、寧ろ不可思議である。彼女は最善の課程として自信をもち、その絶頂に向つて戦つた。彼女は正しく一家の主婦としての權利を要求し、眞人と姑との何れにも結びつけられて中立し難き責任を宣言し、眞人と彼女との間にあつて何等軋轉の種を蒔くもの無からしめんとした。その眞人をして、結局、妻か母かの選擇をなさしめる必要があつた。エム・ギオンは普通一般の型に屬する男である。彼等は高く社會の眼の前に立つ、當然に、主義の人として。然しその家庭の風色は反省の缺乏と利己的情慾的無分別さより悲慘なものである。彼等は一族人に對する殘忍なる行爲の代價に於て愕然たるべきであつたが、しかも決斷と自制とそれに依てその家庭の義務の包含される或る意識的估價との無いため、彼等に最も接近したる此等の上に猶幾何かの年月の精神的苦惱を科すであらう。もしも彼がその責任を等閑にするやうなことがなかつたならば彼が間接にその著者であつた不幸は彼の前に拂えられ、彼或は正義の側に意を決し、従つて家庭的革命がその結果をなしたであらう。ギオン夫人は獨り沈黙にあつて一切を忍ぶべく思ひ定めた。斯る憂き事多かり



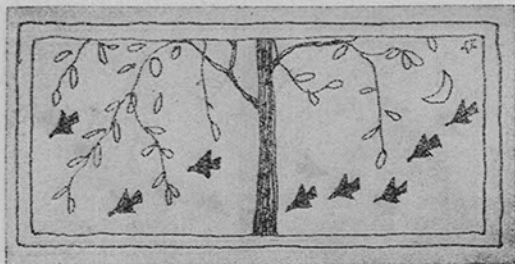
し日を回想しては胸に彼女の堪えたりし規律正しき父の顔面を描いた。神意は愛と賞讃との下に開拓せられたる庭園から凡ての過ぎ行く人の足が塵埃の中にそれを蹂躪する街頭にまで自我を移植した。

死の手はげしき疾患に彼女は幾度か墳墓の邊までたづさへられた。生きたる望みにも惹かれなければそんな場合の危険も無頓着に聽きながされた。重大なる鐘が家族の上に鳴つた。彼女は平然たるものであつた。病院に於ける臨終は豫期せられた。いつもながらの貧乏苦さより寧ろ現在の艱みは得堪へられるもの、何等の成功には伴はないが彼女は兎も角その宗教的經驗に慰安を見出すべく勞働した。また、峻烈に自らを訓練した。たえず懺悔した。身のまはり就ての一切の思ひ煩らひを屈服せしめた。婢女がその髪の毛を梳いてあてくれる時ですら、拂はないのも甚だしい、トマス・ア・ケンピスの書に眼をさらして夢中であつた。或日、彼女は五ヶ年間の短からぬ退隱より出て來たばかりの聖者なる一人のフランシスカンと相見えた。「夫人よ」聖者は唇をひらいた。「わん身はのぞみを失ひ、そして惑亂してなる。それはわん身が内にもつべきものを外に求めてなるか



らだ。おん身は、おん身の心の中に神をたづねなければならぬ、さすればおん身は彼(神)を見出すであらう。」

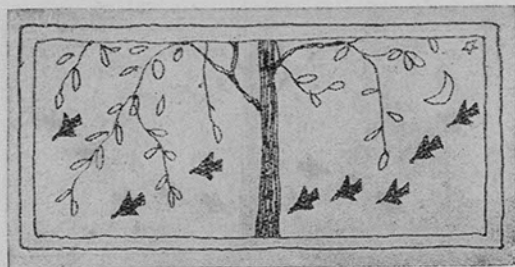
年老ひたる此のフランススカンの言葉は何時の世に於ても神秘主義の宣託によつて語られたる應酬を體現する。それは人々の理解に従つて真理ともなり虚偽ともなる。そこに價高き檀香木から聖母の影像を彫りいださんとした藝術家の古きものがありがある。然し物質は馴致し難きものである。彼の手はその妙技を失ふたやうに見えた。彼は彼の理想に接近することが出来なかつた。絶望して正にその努力を放棄せんとするや、夢の中に聲があつて「樞の木片を取れ、而してそれに形れ」と。粗末なる樞の木片は、その時危く爐に投入られんとするところであつた。彼は直にその聲に服し、そして有名な傑作を出した。此の物語は迷信的な外形主義の敵手として表はれる時、神秘主義の高く支えて保つてゐる真理を反映せしめて



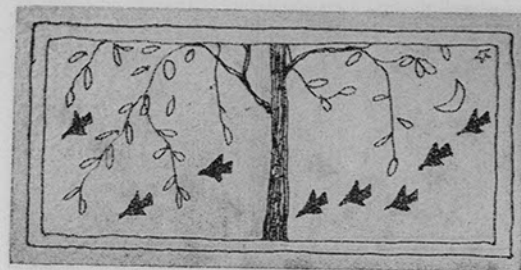
ゐる。宗教的の幸福の物質は、固有のすがたで手近く家庭的に普通にそして爐をまわり圍むところの感情と嗜慾の中に横はる。正しき方向、天上の靈感をして外界より受くるところあらしよ。天は愛の家庭を顧み、家庭は天の希望によつて淨化される。はるかに携へられたる外部的な仕事の、離解として利己的な禁欲主義や祭司職業の値を以て云々すべからざる天に對する賣買は、決して靈魂を顧みし、亦、改新して平安にすることは出来ぬ、しかも神秘主義は此處に止まるのではない。更に一步を進めた。で、その一步は虚偽である。それは外部から靈魂をあまりに引離すであらう。そしてまたその靈魂を係属より自由ならしむべく必要な救助をも他に移す。恰も地を覆ふ樹木の如く、樹木は風の暴力から低き立木を隠す、けれど樹木はまた低き立木の目がけた日光を遮る。それは保護する。それは奪ふ。そしてその樹木の下に執拗な雜草は青々々貴重なる穀粒より更に丈高く繁生するのである。こは的確なる對稱には非ざるべきも靈魂に關する熱心に於て、それは嚴烈でしかも病的な自我意識を鼓舞する。ロオシア・ノオス我等に、彼と彼の兄弟がモニユマンの嶺に立つた時、その身を下へ、下



の建物の上へ、投げ落さざるを得なかつた。語つてゐる。神秘家の眩くら
 んの高潮は、時に、人格の高慢と相似たる感覚を産出する。
 われらが虚弱な感性や生命に對する普通律法の向上に換えて、神秘家
 は怠慢極まる妄想の遊戯をなし、最も謙讓なる反動の犠牲となる。興奮せ
 る過激な氣質は外界よりの証左を熱せる神経の微動のために誤まる。孤寂、
 静默、さては大なる沙漠の眺めに於て、旅人等はいりあり我がふるさとの
 寺の鐘の音を聴く。斯る場合の極度なる機能の感受性は特種な風候によ
 つて惹起され、純眞の思想もしくは記憶を實在せる音響の力に與へる。そ
 して同じく神秘家は屢々靈感し、また、それ自身にかけられる。我が我
 が呼吸が「天よりの微風となり、地獄のあらじ」となる。自我を虚無にす
 る企圖は遂にその自我を後方にするのみ何物をも残さないもので終りを告げ
 るのであつた。單純なれど人情、その法外なる緊張にもはや得堪えざる故
 に熱狂のうしろの引く時——そこで彼の魔法使にして手品師なる幻想は神
 秘的經驗を呼び還すべく伸すべく、然らざれば碍ぐべく招き出され、妄想
 的職業師なる情愛はその詭計を弄ぶべく許された。恰もナイル河の水の退



くや否やカイロの水路は舞臺となり、その上で兩岸の群衆に戯弄者がうの
 巧妙な藝當を見させるやうなものである。
 さて、ギオン夫人に歸らねばならぬ。



肉體の合奏の 進行曲

山村暮鳥

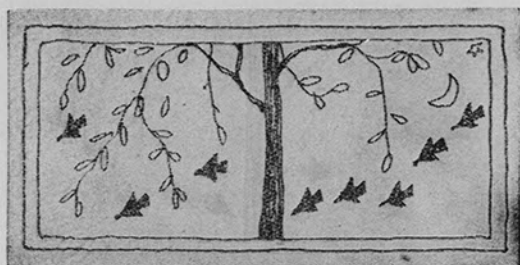
まつてゐるのは誰。土のうへに芽ぶいた草が
おどろいてゐる。それに焰をなげつけ、投げ
つけてゐる絶望の太陽。時でもない心の日向
葵のうめきの音楽。永遠に生れない畸形な胎
兒のダンス、うのうごめく純白な無数の足の影。
わたしの肉體は底のしれない孔だらけ……銀

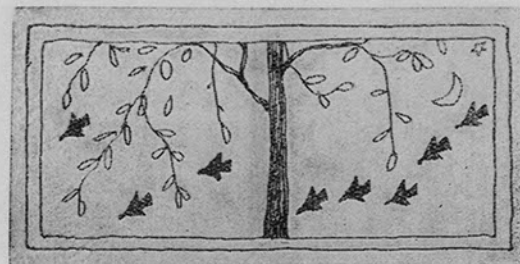
の長柄の投鎗で事實が夜の讃美をかい探る。

わたしをまつてゐるのは、誰。

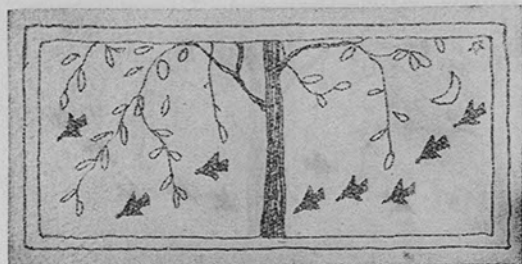
黎明の聲音が近づく。蒼白いどもしびが涙を
滴らす。眠れる嵐よ。おおめぐみが濡らした
墓の上はいちめんに紫色の罪の靄。神經のき
みぢかな花がふるゐてゐる。うれだのに病め
る光のない月は叢の消えさつた雪の匂ひに彼
女をみつけるといふのか。嵐よ。わたしの幻
想の嵐よ。未來よ。

わたしを廻轉る悲しい時計のうれしい針、奇

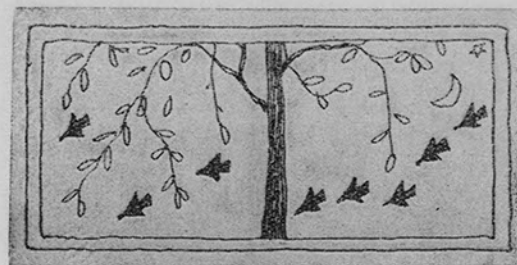




踏がわたしのやわらかな髪を梳る。誰だ、わ
 たしを呼び還すのは。わたしの腕は、もはや、か
 なたの空へのびてゐる。青に朱をふくめた夢
 で言葉を飾るなら、まづ、酔つてゐる北極星を叩き
 落せ。愛と沈黙とをオロンの絃のごとく貫
 く光。のぞみ。煙。生。そして一切。
 蝙蝠と霜と物の種子とはわたしの自由。わた
 しの信仰は真赤なくちびるの上にある。いづ
 れの海の手におちるのか、靈魂。汝は秋の日
 の蜻蛉のやうに慌てゐる。汝は書籍を舐る
 蠶魚と小さく甦る。靈魂よ、汝の輪廓に這ひ
 よる脆い華奢な獸の哲理を知れ。翼ある聲。



眞實の放逸。再び汝はほろぶる形象に祝福を
 乞はねばならぬ。
 靡爛せる本質の淫慾に湧く智慧。溺れて、自ら
 の胡弓をわすれよ。わたしの秘密は蕊の中か
 ら宇宙を抱いてよろめき伸びあがる、かんば
 しく。
 わたしのさみしさを樹木は知り、壺は傾くので
 ある。うして肩のうしろより低語き、なげきは
 見ぬ玩具を愛す。猫の瞳がわたしの映畫の
 外で動く。朦朧な水晶のよろこび。天をさし
 て螺旋に攀ちのぼる汚れない妖魔の肌の香。

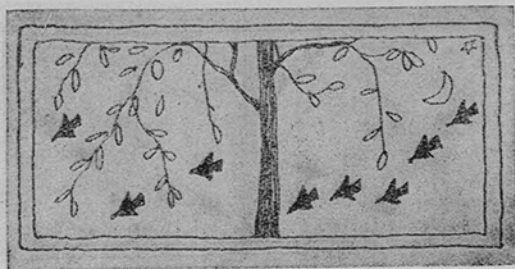


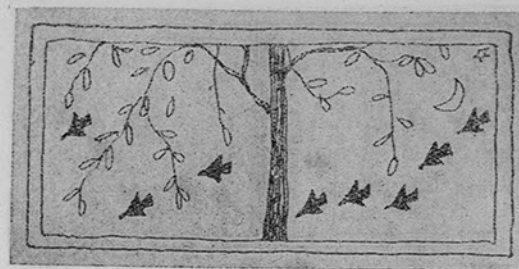
いたすらな疊惑が理性の前で額づいた……
 何といふ痛める風景だ。何時生れた。どこか
 ら來た。粘土の色と金屬の音とのいづれの悲
 しき様式にでも舟の如く泛ぶわたしの神聖な
 泥溝のなかなる火の祈禱。盲目の翫賞家。自
 己禮拜。わたしのピアノは裂け、わたしの時
 雨はどほり過ぎてしまつたけれど執着の果實
 はまだまだ青い。

はるかに燃ゆる直覺。欺むかれて沈む鐘。棺
 が行く。殺された自我がはじめて自我をうむ
 のだ。棺が行く。音もなく行く。水すましの

意識が廻る。

黎明のにはひが近づく。落葉だ。落葉。悩む
 妄想。咽びまつはる相思の落葉。欲望に且て、
 彼女の髪に秘めた緑色の記憶をもどめるのだ。
 人形も考へろ。双掌の平安もおよぎ出せ。い
 ま隠れたる暗がりに泌み滲みいのちの風のう
 なりがする。歡樂も來よ、蛇も來よ、わたし
 の伴侶に。しろがねの弦を断ち、幸福の矢を
 折挫いてしくしくキュビトが泣いてゐる。一
 意専念、私ははてのない憂愁の逕をたどり急が
 う。





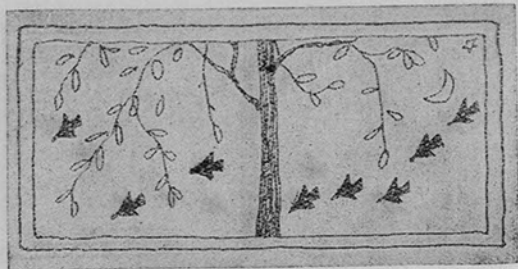
たづねづとろの瞳をみひらくわたしの「死」の螺馬。わたしを乗せた螺馬——論理の血。世界を失ふことだ。うれが高貴で淫卑なサロメが接吻の場となる。ソブラノで。すべてソブラノで。殘忍なる蟋蟀は孕み、蝶は衰弱し、水仙はなぐさめ無く、かねらぬ鳩は眩ゆきおもひをのみ残す。

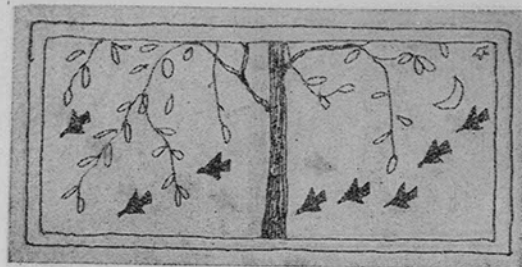
おお欠伸するのはセラビムか。黎明の聲が近づく。わたしのろくでもない計畫の周囲をさ迷ふ美以上の美の懺悔。微睡の信仰個條。むかしに離れた黒い蛆蟲。鼻から口から眼から耳から這ひ込むキリスト。藝術の假面。うこ

で黄金色に偶像が塗りかわられる。

まつてゐるのは誰。うしてわたしを呼びかねすのは。眼瞼のほとりを匍ふ聖靈のものはぬ狂亂。鉤をめぐる人魚の唄。色彩のどいめを刺すべく古風な韻律はふかい所にめざめてゐる。靈と肉との表裏のある淡紅色の窓のがらすに觸れて漸と善惡不立のたつた一つのあかなきかの疵を發見けた。(重い頭腦の上の水甕をいたはらねばならない)

わたしの螺馬は後方の丘の十字架に繋がれてゐる。うして傾く所在なさに鳴いてゐる。





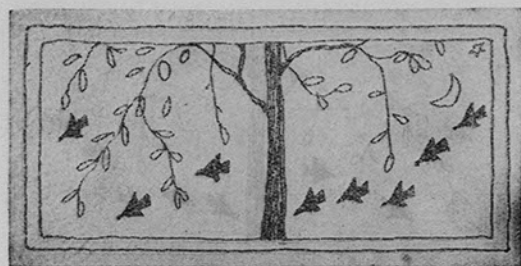
おお、日本。わたしは汝のために薔薇の戴冠式
 を踵の下で祝するぞ。汝は童話の胸に凭れた
 螺馬か。
 わたしを待つのは汝でない。それは見ぬ彼
 女だ。彼女と相見るところの現實の中心、おお、
 爪立てる黎明のゆびさき。大空を楯としてわ
 たしと夢のながい凝視、それが又無始無終の刹
 那を創り、孤獨の無智への飛躍をする。
 わたしの驛馬はうしろの丘の十字架に繋がれ
 てゐる。そして懶くこの日長を所在なさにも
 惜まず鳴いてゐる。

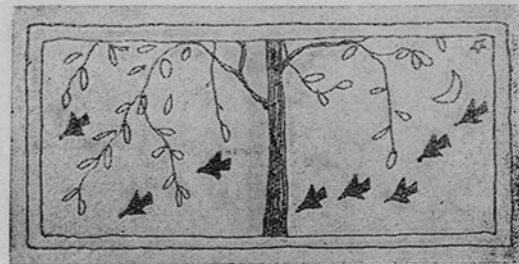
青空に

青空に
 魚ら泳げり。

わがためいきを
 しみじみど、
 魚ら泳げり。

魚の鱗
 ひかりを放ち、





こゝかしこ、
さだめなく、
数あまた泳げり。

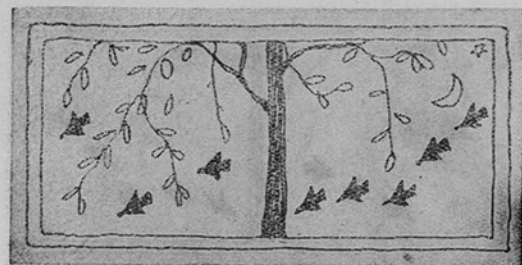
青空に
魚ら泳げり。

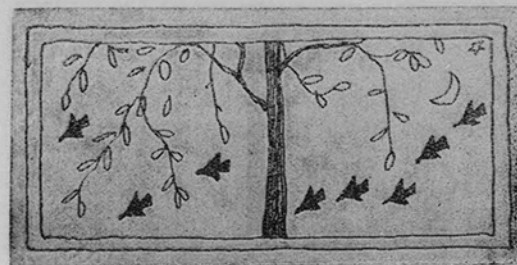
その魚ら、
心をもてり。

逕

しろがねの壺に逕あり、
一すぢの紫を引く、
その逕をひたすら
空あほぎ盲者らいそげり。

逕は痛める神経にして
その上に雪、
その上の幻想が
どこしへに掻き消えつ。





空あはぐ盲者らの
手に手に銜^{くは}をとりかわさむ。
しろがねの壺の沈黙、

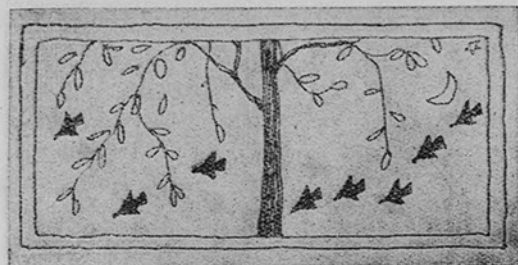
聖靈の綠玉は裂け、
束の間のかなしき逕は
めざめざる獸^{けだもの}の瞳^めに入る。

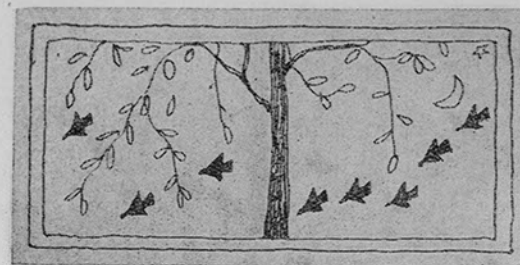
心

マリヤよ、
うらの畑の智慧の木は
空一ばいの花をつけた。

マリヤよ、
花のかほりで眼が盲^{めくら}ひて
むかしの夢をて探る。

けふもけふとて光は霧のやうだ





うなだの髪^{かみ}のけも滞^{とど}れて。

まひるだけれど月の聲^{こゑ}、

何處^{どこ}であらう、わたしを呼ぶ。

まひるだけれど月の聲、
何處であらう、わたしを呼ぶ。

薔薇

薔薇には叡智^{えいち}がある

薔薇は空をまことの愛とし、

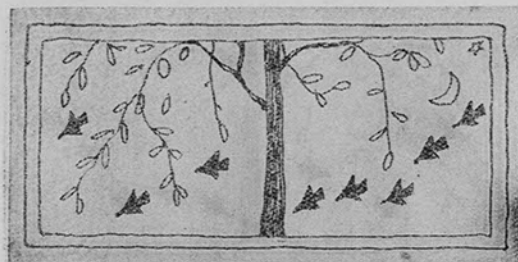
そして私には他の目がある。

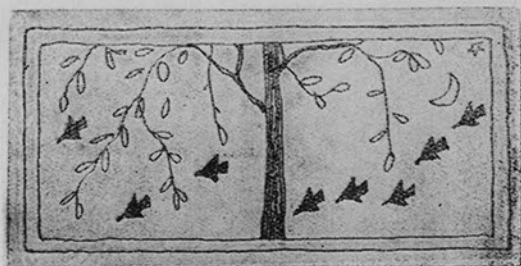
かつて瞑^めちたことのない第三の目、

いやはての世界を作り、

音の中の光りに、いのちは

一切の影をゆめむ。





薔薇は聖なる三位一體。

どうぞ歸る運をおしわて下さい、
私には他の目がある。

消息

不可能な可能とするのである。

「詩作の傍、雑誌も作るさい」ふ事は中々苦勞の多いものです。三木氏は同情してくれだ。ほんとにさうだ。其の上、自分には立派な普通以上の、眼にこそ見へないがそれだけまた過大な心算的の職業がある。それはそれとして、兎に角、自分は職ふ覺悟である。倒れるまで。

原稿は既に整理して印刷所へ廻した。若い文選が光線のあまりよく入らない二階の隅を彼方此方と眼を大きくしてうつきながら譯の解らぬ頃で活字を拾つてゐるころであらう。街の木屋の店頭を第一ばんに飾りたい。

待ちに待った諸氏の玉稿も来ないのが多かつた。中には二度までお願しても、自分のお願ひのしやうが悪

いのか、返事すら預けないのが二つや三つでなくあつた。鈴木三重吉氏は御病氣で。高村氏や服部氏のは忙しくて。川路氏は忘れてしまつたのかも知れない。來月からは佛蘭西の島崎先生にもかいて載ける事と思ふ。

何かにつけて田舎は不利だ。

この創刊號に大なる權威を與へられた寄稿家と大なる光を賜つた表紙畫の製作者、南郷造氏と多くの我が援助者諸氏とに感謝すべく、自分には適當な言葉が見つからぬ。

社友諸君よ。(自分は掲載した各自の創作に對する各自の感想が盡きたい)

かくて、生みの苦みは、今こそ、生みのよろこびである。

新詩研究社にて、四月十六日朝

寄贈新刊

桑の實
太陽の子
秋風の歌

鈴木三重吉氏著
福士幸次郎氏著
若山牧水氏著

春陽堂發行
洛陽堂發行
新聲社發行

詩歌

秀才文壇

創作
現代詩文
南方の花

地平
潮流

潮
ヒヤシンス
茨城新論

眞珠
新文藝
扉

福島新聞
秋田魁新聞

羽後新聞
其他

創刊號

每月一回一日發行

■壹冊定價金貳拾錢

■本誌に關する一切の用件は新誌研究社宛の事

大正三年四月廿八日印刷
大正三年五月一日發行

(載 轉 禁)

發行人	關內彦太郎	福島縣平町字二丁目廿九番地
印刷者	根本吉太郎	福島縣平町字紺屋町廿五番地
印刷所	大正活版所	福島縣平町字二丁目廿九番地
發行所	清光堂	振替口座東京五三八八番
發賣所	東京市神田區表神保町 東京 京堂	振替口座東京二七〇番

編輯所

新詩研究社

福島縣平町振撫小路

關西河 德和孫氏

關西河 德和孫氏

發賣 東 京 堂

發賣 南 堂

發賣 大 五 郎 源 報

發賣 好 本 吉 太 道

發賣 關 內 泰 太 道

(發 賣 冊)

大正三年四月一日發行
大正三年四月八日發行

關西河 德和孫氏
關西河 德和孫氏

關西河 德和孫氏

手紙 低く 車 口 文 本 存 在 不 明
COSA BELLA
MORTAL PASSA
E NON D'ARTE.

三猿文庫